文化財通信くまもと
第37号
平成31年3月
熊本県
教育委員会

古代菊池郡の有力豪族のムラか

～赤星石道遺跡～

熊本県の北部、阿蘇の北外輪山から有明海へと西流する菊池川。赤星石道遺跡は、その中流域、菊池から山鹿かけて広がる菊鹿盆地の東端近く、菊池市大字赤星にあります。菊池川左岸の微高地上に立地し、西側に古代官道のルートが推定されています。

国道325号線の拡幅工事に伴う今回の発掘調査では、調査面積1,600㎡の中に、2間[※1]×5間の側柱建物や2間×3間の総柱建物など、規則的に配置された掘立柱建物や、須恵器や土師器など多量の土器が廃棄された土坑など、8世紀後半から9世紀中頃までの集落の一部が見つかりました。土坑に廃棄された土器には、底に穴を空けたり、口が割られたりと意図的に破砕された壺もあり、祭祀・儀礼の痕跡がうかがえます。

調査風景（北西から）

こうした建物配置の計画性や祭祀・儀礼行為の存在から、赤星石道遺跡は、菊池郡における有力豪族の館あるいはその周辺施設であることが考えられます。そして、近隣に所在する赤星福土・水溜遺跡、赤星灰塚遺跡などの集落遺跡を含めて、大規模な遺跡群（ムラ）を形成しており、古代菊池郡の九つあった郷[※2]のうちの一つの郷が、赤星の地にあったものと思われます。

調査区全景（南から）

※1間　柱と柱の間

※2郷　古代の行政区画で50戸で1郷とした

平成２８年熊本地震からの復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の保護について

平成３０年度、熊本県では熊本地震からの復旧・復興事業に伴い実施される、土地区画整理や災害公営住宅建設工事及び道路建設事業に先立ち、埋蔵文化財保護の観点から予備調査（踏査・試掘調査・確認調査）や発掘調査を県外からの３名の派遣専門職員の力をお借りし行っています。

ここでは、県がおこなっている県道熊本高森線拡幅工事（都市計画道路益城中央線事業）に伴う試掘調査と益城町木山地区で予定されている土地区画整理事業、益城町がおこなった災害公営住宅建設に伴う大辻遺跡発掘調査について紹介します。

被災地における復旧・復興事業に伴う工事は今後も続きますので、発掘調査現場を見かけたら、調査員に気軽に声を掛けてみてください。

○県道熊本高森線道路拡幅工事（都市計画道路益城中央線事業）に伴う試掘調査

この工事は熊本地震で被害の大きかった熊本市東部と益城町中心部を結ぶ、災害に強い街づくりを行うための道路拡幅工事です。今のところ試掘調査の結果、遺跡（埋蔵文化財）は見つかっていませんが、残りの区間で見つかる可能性もあります。

○土地区画整理に伴う確認調査

益城町中心部にあたる木山地区では土地区画整理事業が予定されており、工事の範囲がほぼ宮園Ａ遺跡に重なっています。遺跡は弥生時代から中世までの土器の散布が見られましたので、工事に先立ち確認調査おこなっています。

またこの調査と同時に、道路拡幅工事範囲内にある石造物の調査も併せておこなっています。予定地には多くのお地蔵さんや石塔などがあり、これまで地域で大事に守られてきたものです。これからも地域の宝として大事にしていくために詳しい調査を行っていきます。

○災害公営住宅建設に伴う大辻遺跡発掘調査

この事業は、益城町が中心となっておこなっている発掘調査です。

県では被災市町村支援の一環で職員を１名派遣し、町と共同で発掘調査をおこないました。遺跡からは縄文時代後期（約 3,000 年前）から中世（約 500 年前）まで長い期間、人々が生活していた跡が見つかっています。

○用語の説明

踏査とは…土地を歩いて地形や土器の散布の状態を調べる調査のことを言います。

試掘調査とは…地面を掘り遺跡がないかを直接調べる調査のことです。

確認調査とは…遺跡地図に載っている遺跡の範囲内で行う調査で、遺跡の性格などを調べる調査です。

弘法大師をまつる仏堂

― 下里御大師堂 附 厨子 ―

下里御大師堂は、熊本県南部に位置する球磨郡湯前町に建っており、大きさは幅約 4.6m、奥行き約 4.6m の木造で、屋根は茅（植物）で葺いてあります。

建てられた年代は、使用工具や柱の形などから 17 世紀中期頃と考えられます。

厨子も木造で、幅約 1.4 m、奥行き約 0.9 m、正面には四天王を極彩色で内側に描いた扉があります。

県内で現存する最古の大師堂であり、いずれも質の高い御大師堂、厨子が揃ってよく残されていて、近世初期の宗教的な空間の姿をよく伝えています。

外からみた御大師堂

弘法大師像

津森神宮お法使祭

―益城町・菊陽町・西原村―

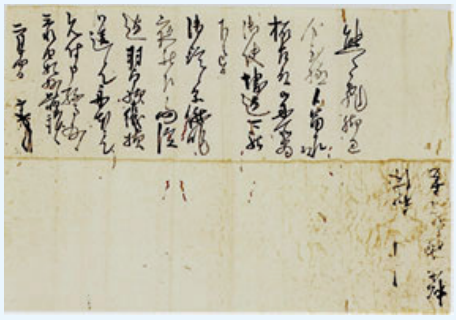
津森神宮お法使祭は、毎年 10 月に開催される津森神宮（益城町所在）のお祭りです。10 月 30 日の当日祭では、益城町・菊陽町・西原村の 3 町村にまたがる 11 地区が毎年順番にご神体の受け渡しを行います。その際、ご神体を載せた神輿を中心に行列が組まれ、途中に設けられた「お休み場」では神事が行われ、踊りなどが奉納されます。特に、ご神体を受け渡す間に、神輿を何度も地面に投げ落とす場面は、お法使祭の見どころの一つとなっています。ご神体を受け取った地区は、「お仮屋」と呼ばれるワラ等で作った仮設の建物内にご神体を安置して 1 年間お祀りし、翌年には次の地区へと受け渡しを行います。

地面に投げ落とされる神輿

現存する利休最後の書状

千利休書状（二月十四日）

安土・桃山時代に茶人として活躍した千利休（1522～1591）が松井康之にあてた書状です。自刃２週間前の日付が記されており、現存するものとしては利休による最後の書状と言われています。



千利休書状（二月十四日）

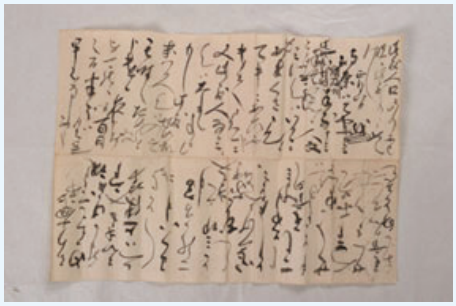
天正19年（1591）2月14日、豊臣秀吉の怒りに触れてしまった利休は、秀吉の命令に従って京都から堺に帰りました。その直後に松井康之に書状を送りました。

書状では、秀吉から堺に向かうよう命令を受けて急いで京を離れたことを伝えています。淀（現在の京都市伏見区）の船着き場で思いがけず細川忠興と古田織部の見送りを受けて感激したことを述べています。書状の最後には、千利休がすでに死を覚悟していたことを感じさせる言葉も残されています。千利休と細川忠興の交流の深さを物語る貴重な資料です。

江戸時代初めの肥後を映し出す

細川忠興・忠利発給文書群

江戸時代の初めから肥後をおさめた細川忠興・忠利・光尚三代の熊本藩主親子の間で取り交わされた書状が大切に残されています。慶長５年（1600）から正保２年（1645）にかけての内容を記した合計２３６３点に及ぶ文書群です。



細川忠興・忠利発給文書群

この文書群を読み解くと、細川氏が江戸幕府のもとで肥後領内をどのように統治していたかを知ることができます。中には、茶の湯や鷹狩りなどの文化面に関する内容を記したものもあります。江戸時代初期に作り上げられた政治の仕組みとともに、熊本地域の特色ある地域社会の状況や風土を、現代に生きる私たちに伝えるものとなっています。

くまもとの赤

―装飾古墳の場合―

古墳内部の石室や石棺、横穴墓の入口などを浮き彫りや彩色でデザインした古墳を装飾古墳と呼んでいます。６世紀を中心として、南は熊本から北は宮城までの地域で営まれた装飾古墳は、古墳全体の１％にも満たない非常に珍しい貴重なものです。

釜尾古墳

石室の装飾は、古墳に葬られた人を護る鏡、盾、甲冑、刀剣、弓矢のレリーフとして不知火海沿岸に登場します。この装飾古墳が宇土半島を越え有明海沿岸に広がると、２つの変化が生じました。一つは文様が幾何学的にデザインされること、あと一つは赤く彩色されることです。

一見複雑な幾何学的文様も、基本図形である○と△と□の集合です。平滑に整えた阿蘇凝灰岩の岩肌に、コンパスや定規を使いサイズをととのえた○△□が、センタリング、上寄せ、下寄せ、等間隔に配列されています。この○△□が反復して重なり連なるリズムをベンガラの赤が彩ります。ベンガラは、阿蘇の火山活動がつくり続ける阿蘇黄土を細かく砕き、土器で焙った顔料です。高い品質と豊かな量のベンガラは、熊本地震を起こした布田川断層沿いに広まり、装飾古墳で最もよく使われる赤色となりました。

大型化した石室にはストーリーを思わせる絵が装飾されます。船に乗った馬、舳先にとまるカラス、手をひろげる人。現在ではありがちな風景かもしれませんが、古墳時代には船と馬は最先端の移動手段、舳先の八咫の鴉は道案内の神獣、手を広げた人の頭には王冠が載り、この世とあの世が織り重なった世界が赤、黒、白、黄、青、灰色で絢爛豪華に描かれています。月の世界に住む蛙、石室の天井に描かれた満天の星空など、装飾古墳に配置されたモチーフは、大陸の文化がすでに人々の心の糧となっていることを物語ってくれます。

井寺古墳

装飾古墳には地域の資源と最先端の情報が惜しみなく注がれ、葬られた人を悼み、慰め、護り続けているのです。

国史跡鞠智城跡

―鞠智城跡の発掘調査―

鞠智城跡の発掘調査

熊本県教育委員会では、鞠智城跡の発掘調査を昭和４２年度から実施しており、平成２２年度までに３２回を数えます。

鞠智城跡の構造解明に向けた取組みのなか、これまでに、長者原地区をはじめとして長者山地区、貯水池跡、深迫門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡、南側及び西側土塁線等の発掘調査を実施し、多くの基礎的データの収集と解析を行ってきました。その成果は、平成２３年度に刊行した総合報告書『鞠智城跡Ⅱ』に結実しています。

今年度からは、平成２８年３月に策定した『第３次鞠智城跡保存整備基本計画』のもと、①城門跡、②土塁跡、③貯水池跡の構造解明などを課題として発掘調査を実施する計画です。平成３０年度は「堀切門跡」の整備に向けた構造解明のための調査を行いました。

第３３次調査

堀切門跡は、史跡鞠智城跡の南側、南東方向に開口する谷部に位置します。平成１０～１３年度に調査を実施し、基盤層である凝灰岩を刳り抜いて登城道をつくりだすとともに、２段構造の版築土塁を築いていたことが判明しています。

また、門礎石（石製唐居敷）の位置や付随する柱穴が確認されているため、門の位置はほぼ特定できます。

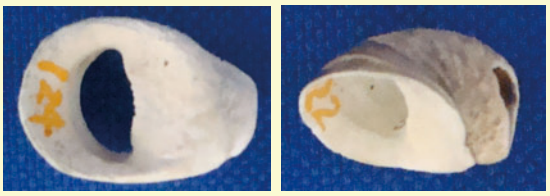
今回の第３３次調査では、いくつかの課題を設定し調査を進めていますが、ここで紹介するのは、城門の上屋構造を把握するため、前回調査後、保存のため埋戻した箇所の再調査内容です。

再調査の結果、以前確認した道路跡や柱穴が良好に保存されていることがわかりました。前回の調査で結論を出せなかった箇所も確認することができました。今後、再調査成果をもとに、様々な分野の専門家も交えながら、どのような上屋構造が想定できるか、時間をかけて考えてまいります。

熊本県出土の展示遺物①

―黒橋貝塚(くろばしかいづか)―

貝面(かいめん)　(2019/10/1 ～ 12/22)



貝製玉(かいせいたま)　(2020/1/1 ～ 3/29)

椎骨製耳飾(ついこつせいみみかざり)　(2020/1/1 ～ 3/29)

貝輪(かいわ)　(2020/1/1 ～ 3/29)

サメ歯製垂飾(すいしょく)
(2020/1/1 ～ 3/29)

熊本県教育委員会では、熊本県がおこなった埋蔵(まいぞう)文化財発掘調査で出土した文化財を保管し、展示や貸し出し等での活用を行っています。平成３１年（２０１９年）度の展示のため博物館に貸し出しをしている文化財を紹介します。今回は平成３１年度に九州国立博物館で展示予定の文化財です。

熊本県は東に九州山地等の山が連なり、西は有明(ありあけ)海や八代(やつしろ)海の海に面しています。現在は海から少し内陸に入った熊本市南区城南町下宮地(しもみやじ)に黒橋貝塚(くろばしかいづか)があります。縄文時代中期から後期にかけての貝塚(かいづか)で、多くの貝製品が出土しています。貝製品の一つに貝面(かいめん)というイタボガキの蓋(ふた)に二つの穴を開けた貝製品があります。儀礼(ぎれい)に使用されたと考えられています。韓半島でも貝面が出土しており半島との縄文時代のつながりが考えられます。

黒橋貝塚では、ほかにもアクセサリーとして使われたと思われる文化財があります。貝製玉(かいせいたま)、椎骨製耳飾(ついこつせいみみかざり)、貝輪(かいわ)、サメ歯製垂飾(すいしょく)です。それぞれヒロクチカノコ、サメの椎骨(ついこつ)、フネガイ、アオザメの歯が利用されていました。貝輪(かいわ)は縄文時代では女性が身に着けていたと思われます。

貝塚には海の幸(さち)のほか山の幸(さち)も見られます。動物製の骨角(こっかく)もアクセサリーに使われています。鹿の角を使った笄(かんざし)がそれにあたります。

石製品のアクセサリーも出土しています。有孔石製品(ゆうこうせきせいひん)いわゆる大珠(たいしゅ)と呼ばれるもので、結晶質石灰岩(けっしょうしつせっかいがん)（大理石(だいりせき)）からできています。大理石(だいりせき)は希少で、有孔石製品(ゆうこうせきせいひん)は当時貴重なアクセサリーであったであろうと思われます。

＊写真の（　）内は九州国立博物館での展示期間です。

熊本県出土の展示遺物②

―石の本遺跡群・太郎迫遺跡―

旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が出土している遺跡の一つに石の本遺跡群があります。石の本遺跡群は、熊本市平山町に所在します。１９９９年に開催された「くまもと未来国体」秋季大会の主会場の建設にともない、発掘調査が行われました。紹介する遺物は、現在の熊本県民総合運動公園えがお健康スタジアムから補助陸上競技場、お楽しみ公園の位置から出土しています。

局部磨製石斧は、現在お楽しみ公園がある小山山の中腹から出土したものです。出土した層は今から２万５千年前の姶良丹沢火山灰の層よりも下にあたります。350 点以上の磨製石斧が出土しており、森林伐採を行っていたと推測されます。

埋設土器は、現在の補助競技場の北側で出土しました。時期は縄文時代で、住居址の中から出土しています。

縄文時代には埋甕と呼ばれる埋設土器があります。食品貯蔵や水の貯蔵、便所、幼児墓棺、胎盤収納に使われたという説があります。

紹介している埋設土器は深鉢に浅鉢が組み合わされて出土していることから、埋葬に使われたものと考えられています。

同じく石の本遺跡群から出土したものに玦状耳飾があります。この玦状耳飾はⅢ層からⅣ層の包含層掘削時に出土しており、詳細な時期は不明ですが、調査者は縄文時代早期後半から前期前半の可能性を考えているものです。

熊本市の金峰山東麓の台地上に太郎迫遺跡・妙見遺跡があります。太郎迫遺跡からは、具象形の土偶が数多く出土しています。右写真の土偶は、頭部が欠けていて木芯痕があります。手足の先が薄く中央付近が厚くなっています。中央部が厚くなった円盤で、土偶の脇と股間にあたる部分を切り取ったものです。

鹿角製笄　（2020/1/1 ～ 3/29）

骨製刺突具　（2020/1/1 ～ 3/29）

有孔石製品　（2020/1/1 ～ 3/29）

局部磨製石斧　（2020/1/1 ～ 3/29）

埋設土器　（2020/1/1 ～ 3/29）

玦状耳飾

（2020/1/1 ～ 3/29）

土偶

（2020/1/1 ～ 3/29）

文化財通信くまもと第３７号　平成３１年３月３１日
編集・発行：熊本県教育委員会
〒 862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺
６丁目１８番１号
印刷：株式会社 アイ・ネット